



円山青年一揆実行委員会事務局
永井 宏 和

僕らが一揆に 立ち上がった理由(わけ)

深刻化する青年の就職難・雇用の実態、“勝ち組”“負け組”などの言葉に働く青年も働きたい青年も「自分に能力がないから」と悩み模索しています。「悪いのは一人ひとりの青年じゃない。あきらめずに立ち上がろう」と6月12日、円山公園野外音楽堂で行われた「円山青年一揆」。「街頭でもらったチラシを見て涙が出そうになった」「『青年は悪くない』といわれてうれしかった」と共感を広げ、ムシロ旗を手にした働く青年、フリーター、学生など992人が集まりました。

きっかけは昨年12月の「全国青年大集会」。参加した青年の「京都でもこんな集会ができないか」のひと言から、2月17日に第一回実行委員会が呼びかけられました。最初は「室内の会場で、規模は500人くらい」「横文字のしゃれた名前を」「人を集められる有名人をよびたい」という議論もありましたが、深刻な実態が話し合われるうち、「従来のとおりくみではあかん。街を歩いている青年が気軽に参加できる集会にしたい」「青年は今の実態にもっと怒っていい。青年の怒りに火をつけたい」と、3,000人を収容できる円山音楽堂を青年で埋め尽くす「円山青年一揆」をしようと決まりました。

メイン企画には、昨年の球界再編問題で球団オーナーの横暴に立ち向かったプロ野球選手会労組事務局長の松原徹さんに講演を依頼。一度は先約があると断られたものの、「厳しい現実の前に、あきらめずに声をあげようという熱意が伝わってきた。今どき青年だけで3,000人を集めようと思うこと自体すごい」と再度連絡があり、駆けつけてくれることになりました。

京都府内各地でも「こんな集会ができないかと



思っていた」「自分の周りにも悩んでいる青年がたくさんいる。地域でも運動を大きくしたい」と、呼びかけたわけでもないのに9つの地域実行委員会が立ち上がり、プレー一揆や京都府北部からのバスツアーの計画が次々と決定。労働組合の青年部でも独自に参加目標を決め、毎日電話や訪問をして参加を呼びかけたり、プレ学習会の開催や職場訪問をするなどの運動が進んでいきました。

一方で、実行委員の青年自身が忙しい仕事の合間をぬっての会議や準備に追われ、一週間前でも参加確認が500人。このままで当日を迎えられるのか、3,000人を集めるためにはどうしたらいいのかと悩む日も続きました。

しかし、直接青年に呼びかけ声を聞こうと街頭やハローワーク前で行った宣伝では、これまでにないほど対話になり、「残業、残業で自分の時間なんて全くない」「アルバイトのかけもちで、将来も見えないし不安だらけ」「本当は正社員として働きたい。何かおかしいと思いながらも、すべて自分のせいにしてきた」と語る青年たちの姿に、3,000人を集める運動をやりきろうという思いが高まっていきました。

梅雨の晴れ間が広がった「青年一揆」当日。「夢をあきらめない」の趣旨に賛同した京都出身のボーカル・ユニット『プライムストーン』がオープニングを飾り、メイン講演では松原さんが、自分たちだけでなく次の世代が少しでもよくなるようリレーしてきたという選手会の歴史や昨年のストライキの経験から「決してあきらめずに頑張れば何かが残る」と青年へのメッセージに力を込めました。

続く「魂のリレートーク」では、野球の試合に

見立てて“バッター”になった青年たちが、低すぎる最低賃金や50社に応募しても決まらない就職活動、22歳の青年が過労死するまで働かされた大企業の実態を告発。木工職人の青年はあきらめずに組合に加入してサービス残業代を支払われた経験を発言しました。

7回目の攻撃(7組目の発言)でジェット風船を飛ばしたり、「行列のできる労働相談所」の寸劇で労働者の権利を学んだり、3時間半の長丁場にも関わらず、あっという間に時間は過ぎていきました。最後に審判に扮した司会者が「試合」は延長戦でも勝負はつきませんでした。この勝負に勝つか負けるかは、これからのみんなのがんばり次第」と呼びかけると、決意をこめた大きな拍手がわきました。

「声をあげることにプレッシャーもあるが一人で抱えるものではない。仲間が大切」「つらいこ

とには文句をいうだけだったが、それでは本当の解決にならないと思った」参加した青年たちから様々な決意が寄せられています。アルバイトでスイミングスクールのインストラクターをしている青年は、子どもの命を預かって1日10時間以上働いても月給11万3千円。「昨日まで別々の思いでいた青年たちが、一揆をきっかけに団結できたことがすごい。団結の輪をもっと広げたい」と現在、職場の仲間呼びかけて労働組合をつくろうと決意しています。

「誰かが動けば必ず何かが変わる」という松原さんの言葉通り、この「一揆」にとりくんだ青年が変わり、その変化は周りの青年にも広がっていきました。「自分らしく、イキイキと働きたい」そんなあたり前の社会の実現を求める私たちのたかひは、これからがスタートです。

コラム どうして? どうする? フリーター、ニート



若者のフリーター、ニート問題

(社)石川県経営者協会
事務局次長

徳田 邦昭

フリーターの増加・ニートの急増

わが国のフリーターの数は、2001年で417万人にもなっている。これは若年人口(15～34歳)の12.2%にもなり、学生、主婦を除いて計算すれば、実に21.2%、5人に1人がフリーターである。更に、ピークが20歳代前半から、20歳代後半に移行し、30歳代も急増しているのが現状である。

フリーターも、「夢追い型」「やむを得ず型」から最近では、何をやっていいのかわからないから、とりあえずアルバイトに就いている「モラトリアム型」が増えてきており、今後も増加を続け、2020年には440万人になり、若年人口の30%に達するともいわれている。

ニート(15～34歳の若年無業者の内、家事

も通学もしていない者)の数を国勢調査でみると、1980年から1995年までは20万人台であったが、2000年には75万人へと急増している。更に、回答しなかった者も71万人おり、この中にも相当数のニートが含まれると推測される。ちなみに、石川県のニートは1.2%である。(全国平均2.2%)

フリーター・ニート増加の背景

フリーター・ニートの増加の背景には、敗戦後の欧米諸国へのキャッチアップを目指して右肩上がりの経済成長を遂げ豊かになった結果、国民の生活苦に対する恐れが希薄になったことや、戦前、戦後の窮乏生活を知らない子供たちが、忍耐力、ハングリー精神など働くために必要な要素を失いつつある点が挙げられる。加えて、昨今の経済のグローバル化の進展や、バブル経済の崩壊に伴う企業の雇用戦略の転換により、学卒者の採用窓口が狭められるとともに、就職できても自分の将来に確たる希望を見出せない不安が、定職に就くことへの意欲を無くさせているように見